

図書館友の会 ニュース

2024 年
1 月号
No. 29

発行 岸和田市図書館友の会 《発行責任者 松谷 敬一》

本年もよろしくお願いたします。

岸和田市図書館友の会 会長 松谷 敬一

きのえたつ

令和6年の干支 甲辰を迎えました。しかし、元旦早々に能登半島の大地震…。被災地の方々のことを思うと「明けましておめでとう」と言うのも憚られるような気持ちになります。一刻も早く復旧・復興されることを心から願っています。

さて、昨年はプロ野球の話題（WBC優勝・大谷移籍高額契約金）で日本の存在が脚光を浴びました。コロナは「第五類分類」になって一段落…。でも、地球温暖化の影響で暖冬・厳冬の入り混じる季節を迎え病気が蔓延。街中のマスク姿は依然変わっていません。

世界ではウクライナ戦争に加え、中東の戦争も加わって、各方面にキナ臭い情報が飛び回っています。国内では、自民党の政治資金パーティ問題をめぐり、政治とカネの問題が再び大問題に浮かび上がってきました。

そういう中でも、私達「図書館友の会」の活動の輪は着実に広がっています。運営委員会へ参加する方も増え、従来以上に皆様が楽しめる企画が目白押しです。楽しく明るい「友の会」活動に邁進しましょう。本年もよろしくお願いたします。



【写真】 桜井市立埋蔵文化財センターで

昨年11月15日、37名の参加で、奈良県の橿原考古学研究所、桜井市立埋蔵文化財センターに行きました。

次ページに参加者の感想を掲載しています。

2023文学歴史散歩 古代にタイムスリップ

二上山を見つつ昼餉や秋高し
博物館出て花梨をひとつ拾ひけり
中出 乙淡

かつらぎの道の駅には柿あまた
五嶋久美子

古代史の学びなおしの三輪の秋
相沢 寿美

三輪山を見上ぐ社や小六月
悠久の歴史つく街秋深む

「文学歴史散歩」に参加して

川原 洋

午前9時前、バスは、参加者の興奮と期待を膨らませて岸和田をスタートしました。車内で、杉原氏から『初期ヤマト政権』のレクチャーを受けながら、目的地に到着する。

最初に、橿原考古学研究所附属博物館を訪問。ヤマト政権の発祥地の貴重な展示と特別展の『古事記編纂者 太安萬侶展』を鑑賞して、古代に思いを馳せました。特に、発掘された建物の前では、古代にタイムスリップしたような錯覚に囚われました。

次の、桜井市立埋蔵文化財センターでは、学芸員の丁寧な説明で、「纏向が日本最初都市であった」という、纏向の歴史的な重みに触れ、感慨を新たにしました。

今回の「文学歴史散歩」は、古代の専門的な内容もわかりやすい説明があり、歴史や文化に興味を持つものだけでなく、私のような初心者にも配慮された企画でした。

「文学歴史散歩」主催関係者には、すばらしい企画と、旅での細かいご配慮には感謝しております。新たな知識と感動を得ることができて、充実した一日を過ごしました。

歴史を学ぶことは楽しい

清水 春代

文学歴史散歩には初めて参加しました。橿原考古学研究所附属博物館と桜井市埋蔵文化財センターの見学も初めてです。

文化財センターでは、邪馬台国の所在地と考えられる纏向遺跡から発掘された物が特に目を引きました。ミニチュア時、木製の剣や道具類、カエル(!)も含めたいろいろな獣骨、たくさんの桃の種等が展示されていました。時間の制約もあり、じっくりと説明を読めなかったことが心残りでした。

家に帰った後、私は、纏向遺跡発掘についての報告がされた泉大津フォーラム（平成22年）のレポートを読み返しました。（実は、行く前にも読んだのですが。）

そこで、ミニチュア土器等の品々は、纏向遺跡の大型建物D(3棟の建物の内、東にあり最大の建物)の南側の柵と一部重なった位置に掘られた大型土杭の中に埋められていた物であることが、レポートからわかりました。「建物群の解体時にとり行われた『マツリ』の痕跡とも見ることもできよう。」とも書かれています。

建物群が廃絶されたのは3世紀中頃で、卑弥呼が死んだ時期と重なります。もしかしたら、大型土杭の中の品々は卑弥呼の身の回りにあって、呪術に使用された物もあったかもしれないと私は想像してしまいます。

古代では、天皇が一代ごとにみやこを移転したそうです。この建物群は卑弥呼の死後に遺棄されたのでしょうか。卑弥呼の後に王となった臺与（とよ）は、どこか別の地に新しいみやこを築いたのでしょうか。

でも、泉大津フォーラムのレポートは10年も前のものです。その後、いくつも新しい発見があったでしょう。私は、纏向遺跡について、もっと知りたくなりました。

友の会バスツアーの感想

高原 喬二

幹事の皆さんには大変お世話になっています。特に、バスの中で杉原さんの見どころの解説はありがたい。目的がハッキリして勉強になり、いつも頭が下がります。そんなバスツアーに毎回惹かれて参加しています。

今回の纏向遺跡も、目からウロコの連続でした。私は初期大和政権の発祥地の展示で、鉄の鏝に興味がありました。当時はまだ朝鮮半島から輸入される鉄板や日本でのタタラ鉄のない時代でした。そんな時代にアシなどの根元に水酸化鉄が集まり、それを原料に、低温で製鉄が行われていたようです。纏向は大和川が熊手のように流れ、アシなどが群生する湿地帯であったとの説明でした。

展示品は大物の鉄器はなく、地元で作った小物の鍬が多かった。ヤマトタケルは水酸化鉄からの製鉄技術を携えて、東征を行ったのでしょう。私の出身地愛知県岡崎市矢作では村人と一緒に矢を作り、川向うの敵と戦った、との言い伝えがあり、先日地元の知り合いから、その戦に鉄の鍬を使ったとの紹介がありました。

古事記編さんの太安万侶展も、すごく面白かった。久米田池、昆陽池など作った行基の墓誌も展示され、行基がより身近に感じられました。

知らないことが、一杯分かる、心躍るバスツアー、次回も参加したいです。

～ 図書館友の会の公開講座 ご案内 ～

短歌教室

詩人・文芸評論家 倉橋健一氏の著作

『歌について・啄木と茂吉をめぐるノート』をめぐる



講師 倉橋健一氏

「図書館友の会」になじみのある倉橋健一先生をお迎えして、著作『啄木と茂吉をめぐるノート』を参考に、定型詩（短歌・俳句・川柳）と自由詩の違いを語りながら、短歌型の歌を掘り下げます。



今回の公開講座は、身近な詩人と歌人をお迎えしてのトークイベント。午後のひと時、どうぞお気軽にお越しください。お待ちしております。

日時 3月3日（日）午後1時～2時30分

会場 岸和田市立図書館本館 3階自習室

定員 先着60人

申込先 岸和田市立図書館 072-422-2142

2月14日（水）午前10時から受付けます。



聞き手 歌人・金川宏氏

文章教室

『何でも書いてみよう!』 昨年11月18日開催の報告

当日は、10人の教室生の他に2人の女性が参加され、倉橋健一先生を迎え、午後1時から4時過ぎまでの公開講座となりました。倉橋先生の講義は、約30分。先生の著書「文章を書く」や以前先生が関わっておられた公文式カード「名詩で覚える言葉のカード」、教室生の文集「文車」、また、ノーベル文学賞作品などにも触れながら、日本語で文章を書くことの楽しさの話をされました。その後の質疑応答では、「読んで、ああいいなあと思えるような文章が書きたいが、どうすれば書けるか」との質問が出され、「自分の体験を書いていくと、当時の自分が気付かなかったことに気づくことがある。それが、話を広げたり話のテーマになっていく。この流れが、書く力を育ててくれるように思う。とにかく、なんでも書いていくことが大切だ」と言われました。その後、新しい参加者の方と教室生の作品十点について、みんなで合評し合い、公開講座を終えました。

再発見教室

歴史の重層性からみた摩湯山古墳と久米田古墳群

講師：山岡 邦章 氏（岸和田市教育委員会 郷土文化課）

昨年12月23日に八木市民センターで開催され、53名が参加しました。池田雅治さんから寄せられた感想を紹介します。

「古墳」とは、正統な継承者であることを証明するための舞台装置であり、権力の継承のシンボルである。また、前期古墳の特徴は「聖俗二重陵墓制」にあり、「聖」とはシャーマン、「俗」とは軍事に代表されるそれぞれの王を表すと言われている。

しかし、「摩湯山古墳」に関しては、学術的な発掘調査はほとんど行われておらず、その実態は不明なままで、一般的に唱えられている様々な巷説のすべてが憶測にすぎず信頼性のあるものは皆無とあってよいものである、と郷土文化課山岡氏は説く。

そのような現状に対して、彼はこれまで行われた堤の一部や昭和と平成に行われた測量調査図等の比較考量から、人工的に配置されたと推量される石の並び、「造り出し」や祭祀跡の痕跡、馬子塚古墳との関係性、副葬品としての摩湯山古墳の円筒埴輪と久米田古墳群のガラス玉との対比等を検証していく。

いつの日にか、摩湯山古墳の本格的な発掘調査の行われることを夢見ながら、彼は今日もその実態に迫るべき事実を積み重ねている。

地名の秘密

②6 枚方(ひらかた)

「枚」を「ひら」と読むのはなぜ

枚方市駅は京阪線の中でもトップを争う駅である。一日の乗降客は9万人を超えており、さらにここを起点にしている交野線(かたのせん)の乗り換え客を含めると15万人にもなる。これは淀屋橋の13万人を超え、京橋駅の20万人について2番目といわれている。枚方台地は先史時代から人が住みついたところだった。古墳も多い。古代継体天皇が樟葉で即位し、5年間ここに都があったという。渡来人も多く住んだ。市内の交野(かたの)は平安貴族の遊獵地として知られた。京都への交通路として、常に軍事上の拠点となり、多くの戦乱の地となった。また淀川の船宿、京街道の宿場町としても栄えた。この「枚方」をなで「ひらかた」と読むのか。これはなかなか難しい。大阪の難読地名でも筆頭にあげられる代物(しろもの)である。

『古事記』によれば、後に神武天皇となる神倭伊波礼毗古の命(なるかむやまといわれびこのみこと)天皇とその兄に当たる五瀬の命(いつせのみこと)は軍を率いて日向(ひむか)を出て、東国に向かった。いわゆる神武東征である。浪速の渡りを越え「白肩津(しろかたつ)」にたどり着いたとある。この「白肩」が転訛し「枚方」になったと言われる。しかし地形的に「津」ではないことから「枚」は「平」で平ら、「方」は「潟」で「干潟(ひがた)」などを表す言葉が由来ではないかと考えられている。つまり淀川に近いところに、いくつもの干潟があって、それを「一枚(ひら)」「二枚(ひら)」と数えたところから、このような地名が生まれたと考えられている。しかし「平地(へいち)、もしくは{平たい地方}を意味する{平方(ひらかた)}から生じた」との説もある。「枚方も{まいかた}より{ひらかた}と読む方が響きがよいし……」

今回、参考文献は省略します。

《文責》 文章教室 浦田榮二